

書 評

国文学研究資料館史料館編

『アーカイブズの科学』（上・下）

（柏書房、2003年）

坂 口 貴 弘

創価教育研究センターが進める「池田研究」の基盤構築を考える上で、参照すべき知見に満ちた一書を紹介したい。

史料なくして歴史なし

ある人物の生涯や団体の歴史を体系的に研究しようとするとき、まずやらなくてはならないことは何であろうか。なにより中心的な作業となるのは、その人物や団体に関する史料（歴史資料）を網羅的に探し出すことであろう。考古学的な古代史の研究でも民俗学的な近世史研究でも、そして近現代の人物研究の場合においても、この原則は等しく当てはまる。

歴史研究は思い込みや伝聞を排し、信頼できる史料を徹して読み込むことから始めなくてはならないというのが、近代的歴史学の大前提である。史料に基づかない研究は説得力のあるものとはみなされない。史料が存在しない時代や団体について、実証的、科学的な歴史研究を行うことはできないのである。

保存なくして利用なし

つまり現在、我々が史料を利用して過去の事物を知ることができるのは、各時代の先人たちが史料を廃棄せずに継承してくれたからに他ならない。この原理に照らして考えるならば、現代の人物や団体の業績が数百年の後にまで確実に伝わっていくかどうかは、その業績に関する史料が十全に伝えられるか否かにかかっているということになる。日々生み出されている様々な記録や情報をどれだけ散逸させずに保存することができるかが、21世紀という時代に対する未来世代の評価を決定づけるのである。

すなわち、これまで残されてきた過去の歴史に関する史料を保存するとともに、現代に関する史料を将来に伝えることは、現代に生きる我々に課せられた責務なのである。それではどうすれば、我々が会えることもない遠い未来の世代にまで史料を確実に残し続けることができるのであろうか。この課題に真正面から応えようとしているのが、ここで紹介する『アーカイブズの科学』である。

アーカイブズとは

この本の紹介に先立って、「アーカイブズ」とは何であるかについて簡単に述べておきたい。アーカイブズは英語のarchivesにあたる。「アーカイブ」「アーカイブス」などの語形も含めて、日本でも最近広まりつつある言葉である。

アーカイブズの意味についてはいろいろな解釈があるが、簡単に言えば「長期間保存されてきた記録、あるいは長期間保存されるべき記録」という意味である。

この場合、アーカイブズの生まれた時代や環境、種類や形態は問わない。すなわち、古代の粘土板や木簡、平安時代の貴族の日記、江戸時代の大名の書状、現代の政府閣議の議事録、コンビニエンスストアで発行されるレシート、戦争体験の聞き取りが収録されたカセットテープ、1ヶ月前の患者の症状について医師が記入したカルテ、昨日受信した電子メール、などのすべてを包含する概念である。そのため、およそ現代の組織でアーカイブズを保有していないところは存在しないといえる。

なお、上記のアーカイブズが保存される場所や機関も、アーカイブズと呼ばれる。前者の意味では「記録史料」「公文書」「保存記録」など、後者の意味では「文書館」「公文書館」「記録保存館」などの訳語があてられることもある。

このアーカイブズを取り扱う人のことを「アーキビスト」と呼ぶ。その仕事には以下のようなものがある。

(1) アーカイブズの調査・収集

ある地域や団体についてのアーカイブズが、どこでどのように保存されているかを調査し、必要に応じて文書館等のアーカイブズ保存施設に移管する。

(2) アーカイブズの評価選別

各組織が生み出す膨大な現代記録のすべてを永久に保存することはできないので、将来に残すべき重要な記録を選び出す。

(3) アーカイブズの整理

たくさんのアーカイブズの中から必要なものをすぐに探し出せるよう、目録を作成する。

(4) アーカイブズの保存措置

アーカイブズを物理的に保存するのに適した温湿度管理や防災対策を施し、必要に応じて修復を依頼する。

(5) アーカイブズの公開・提供

アーカイブズを利用したい人のために、閲覧、レファレンス、複写、展示などのサービスを提供する。

アーカイブズは必要なのか

このようなアーカイブズの特徴をみていくと、それは図書館や博物館とはどのように違うものなのかといった疑問が生まれる。例えば図書館と文書館は、資料を収集、整理し、閲覧に供する施設であるという点では共通している。しかし、図書は同じものが何千部、何万部と出版されるのが普通であるのに対し、アーカイブズは1点しか保存されない稀少性の高いものであるため、その取り扱いもおおずと異なってくる。また、博物館と文書館は、貴重な文化財を保管する施設であるという点では共通している。しかし、博物館での資料公開は主にガラスケー

スの中での展示という手法をとるのに対し、文書館の利用者は資料を直接閲覧できるのが一般的である。このように、文書館は図書館や博物館とは異なる性質をもつ機関であるため、文書館を図書館や博物館の一種であると考えるのは適切ではない。

一般に、企業や官公庁などの団体がアーカイブズを保存・管理する意義は、主に以下の3点に集約されるだろう。

（1）業務の遂行を効率化する

文書を使わずに行われる仕事はほとんどない。情報社会の到来にともない、文書の増大に悩まされていないオフィスはありえないといってもよい。何年も前の書類やファイルをオフィス内にいつまでも置いておくよりも、重要な文書のみを長期的に別途保存し、必要時に検索して取り出せるようにすることが、業務の効率化に大きく寄与する。オフィスにおける文書管理システムは、アーカイブズとして永く保存されるべき重要文書を確実に管理する仕組みをともなってこそ十全なものとなるのであり、文書館は本来、その団体の文書管理システムの一環として設置されるのが望ましい。

（2）その団体のアイデンティティを明らかにする

例えば大学のホームページやガイドブックを見ると必ず存在するのが、その大学の沿革を記したページである。また、「〇〇大学三十年のあゆみ」といった大学史を編さんする大学も多い。少子化、国際化が進展し、大学の個性化が緊急に求められている昨今にあって、いかなる大学も、自らを成り立たせている個性とはこれまでの歴史の中から創り出されてきたものであることを知っているからであろう。その大学のアイデンティティのよりどころとなるものこそ、歴史を根拠に基づいて物語るためのアーカイブズなのである。その存在意義は、情報公開や大学の社会貢献がいわれる今日では、より重要なものとなってきている。

（3）歴史を振り返る際の材料として活用する

「文書は史料の王」といわれる。後代に書かれた歴史書には執筆者の解釈や操作が入っている場合が多い。遺跡や道具などのモノ資料も有力だが、情報量の点では文字で記された文書には及ばない。その時代に生み出されたナマの文書こそ、最も信頼できる証拠資料なのである。科学的な歴史研究のためには図書館や博物館だけでは足りず、文書館が必要不可欠とされるゆえんである。

日本では、図書館や博物館の存在意義は広く認知されているのに対し、アーカイブズを適正に管理し、そのための施設として文書館を設置するという発想はいまだ十分に普及していない。しかし、諸外国では政府、自治体、企業、大学、教会の多くが自らの文書館を設置しており、そこでは専門職としての訓練を受けたアーキビストが活躍している。そのため、例えば現代政治史研究者の間では、戦後政治史を調べたければまず米国の国立公文書館に行ったほうが、重要な史料を容易に入手でき、丁寧なレファレンスサービスが受けられるというのが常識になっているという。日本でもあらゆる団体に文書館が設置され、各々にアーキビストが配置されるのが望ましいあり方といえよう。

『アーカイブズの科学』について

前置きが長くなったが、このアーカイブズに関する研究およびアーキビストの養成についての国内の中心的拠点の一つが、本書『アーカイブズの科学』の編者である国文学研究資料館史

料館（当時、現在は国文学研究資料館アーカイブズ研究系）である。本書は同館が5年間にわたって行った研究プロジェクトの成果として刊行された「初めてのアーカイブズ学総合講座」（本書の帯より）であり、上下2巻、計42章に及ぶ浩瀚な書物である。

同書が刊行された背景には、アーカイブズに関する議論は単に他の諸学問（歴史学、図書館・情報学、文化財学など）の一部とみなされるべきものではなく、それ自体が独立した学問分野として成立しうる存在なのだ、という認識の浸透がある。また、情報社会の到来や情報公開の推進、少子高齢化の進展などといった社会的要因の中にあつて、日々流通する膨大な情報のうち未来に残すべきものを着実に伝えるためのシステムがますます求められている、といった点も挙げられるだろう。こういった要請に応えるために、アーカイブズに関する研究を深化・充実させ、専門職としての高度な知識と技能を身につけたアーキビストの育成と配置が急務となっている。

では、「アーカイブズの科学」とは具体的にいかなるものなのであろうか。その到達点を示す事例として、本書の中より2つの章の概要を以下に要約して紹介したい。いずれも、創価教育研究センターにおいて行われている業務にとって極めて有用な知見である。

IV部 1編5章 地域史料調査論（下巻p.162-180）

（1）新しい史料調査法の提示と試行

これまでの地方文書などの調査法は、「要は史料の出納に便利のように番号を与え、文書の総量・内容をつかむのが目的である。（中略）多量の史料の時は第一段階として荒仕分けをする。（中略）荒仕分けの最初の作業として、記録帳簿の冊子類と一紙ものの証文・書付類とに形態的に大別する」というようなやり方であった。これらの調査法は、膨大な文書を前に、どうすればすばやく整理ができ、どうすれば能率的利用が可能かということを前提にした形態分け、年代分けなどの物理的区分けであつて、それが現形／原形の破壊をもたらした、といわざるを得ない。

新しい調査法の前提となる整理論は文書館学にもとづくもので、それは「出所原則」「原秩序尊重の原則」「原形尊重の原則」を踏まえた段階的史料整理論といえる。これらの原則は、それぞれの文書群は決して無秩序な文書の塊ではなく、それを生んだ機関、団体、家、個人の組織と機能を反映した体系的秩序を内包している、ということを前提にした原則である。

かかる新しい整理論にもとづいて、安藤正人氏はこう述べている。「最近『文書の立場に立った整理』ということを考えるようになった。（中略）文書の『立場』は単に書かれた内容だけではなく、しばしば、他のどういう文書と一緒に括つてあつたとか、どの文書筆箋のどの引き出しのどの辺の順に収納してあつたとか、家の中のどの場所——蔵の中か母屋の仏壇の下か——にしまつてあつたか、というような点にも如実にあらわれていると考えるからである」。

（2）初期調査の目的と中間番号方式

初期調査の目的は、まず史料群の現状を記録することである。具体的には、写真や図画や記述などによって史料群がどのような場所に、いかなる状態で、どんな容器に、どう入れられて保存されていたのかを記録することである。

この調査手順の特色は、史料群の保存状態の把握や概要を記録するために、史料群をあるひとつのまとまりごとに捉え、それに中間番号を付すという方式を取り入れたことである。中間番号を用い概略的に史料群を把握することにより、現状記録に要する時間は、史料1点1点ごとの保存状態を厳密に記録することと比較して大幅に削減できるし、史料群の内容傾向も素早

く把握することが可能である。中間番号を用いる方式は、時間的制約があるなかで史料群の保存状態を緊急に凍結・記録するには効果的な方法である。

(3) 中間史料目録の試み

史料の内容・機能などを読み込み、他の史料との関連を考え、かつ全体像を勘案しながら行う基本目録の編成にはかなりの時間を必要とする。しかし、自治体史編纂などでは目録編成にあまり手間暇をかけるわけにはいかない。このような問題を勘案して採用したのが、史料の塊やまとまりを単位とした目録編成の方法である。その結果、あまり時間と人手をかけずに目録編成をすることができた。

たしかに内容(主題)目録は一見必要な史料を検索するのに便利で有効のように見えるが、しかしそれは網の目が粗い検索手段であって、そこから抜け落ちるものが少なくないのである。機械的な形態分類、年代分け、物理的な主題分けや単純な分類は、史料間の内的関連の鎖を断ち切り、幅と深さに欠けた史料利用をもたらす可能性が高い。それに比べてこの中間目録は、たしかに内容目録より必要な史料の特定に少し時間はかかるが、しかし網の目は細かく逃れる史料は少ない。さらに、歴史研究のみならず、様々な角度からの利用も十分可能である。

V部 アーカイブズの保存と修復 2章 保存環境コントロール(下巻p.325-375)

(1) 温度・湿度・光

湿度が一定の条件下では、湿度が10℃変化すると紙の寿命が5から6倍変化する。低湿度で保存する方がモノの寿命は飛躍的に長くなる。紙の劣化速度の調査によれば、6-9月の高温期に著しい劣化を受けるが他の月は劣化速度が気温の低下に伴って遅くなる。夏期の冷房は意味があるが、冬期の暖房はモノに対してはマイナスの影響がある。

一般の閲覧室の温度・湿度の設定の基準値としては、一般的には夏期は25-27℃、湿度50-60%RH、冬期は20-24℃、湿度40-50%RHがよい。60%RH以下ならばカビは生息しない。

湿度を50%RHから10%RHに下げると紙の寿命は3倍程度延びるとの報告がある。過乾燥と湿潤が繰り返されると繊維は徐々に角質化が進み、堅く脆くなって行く。そのため、非常に乾いた場所にモノを力がかからない状態で保管しておくのは問題ないが、利用のために通常の湿った環境へ持ち出す回数が頻繁となれば、かえって紙の劣化を促進する恐れがある。また、材料によって望ましい湿度環境は異なることに注意が必要である。

蛍光灯は紫外線に富むため、紫外線をカットする物質を塗布されているものを用いるなどする。ストロボはその発光時間が極めて短いので、その影響は無視できる。箱に入れて直接光が当たらないようにするのも効果的である。

環境の測定は保存すべき資料が保管されているすべての場所においてすべての時間行うのが理想である。温湿度計には種々あり、同じ環境で測定しても異なる値が出る。

(2) 生物被害

文化財の生物対策においては、材質へ安全な方法かどうかを第一に考慮する必要がある。有害生物は、生息条件が合えば次々と繁殖し、その被害が急に増大するので、早期発見が極めて重要である。一般に高温多湿を好み、通気が悪く目の届きにくい場所で繁殖するが多い。

どんな被害がどのくらいあったのか、過去の被害の記録を整理する。漏水、排水管の破損、通風孔、壁の亀裂・隙間の有無、結露、雨漏り、扉の開け放し頻度について点検する。食物が持ち込まれる区画と文化財収蔵区画との間の遮断が十分かどうか点検する。

手垢や汚れ、埃などは、カビやダニの栄養源となるため、文化財がおかれる空間は清浄にし

ておく。防虫網戸を設置する。新しく収蔵する文化財については、確実に害虫を除いたのち、収蔵することを徹底する。

カビの被害が起きたときは、他の文化財に被害が移らないように隔離したうえ、環境の水分の除去・および環境の湿度を下げるのが重要である。およそ70%の消毒用エタノールが殺菌効果が高いが、水気が材質に悪影響を及ぼす場合には、無水エタノールで代用してもある程度の殺菌が可能である。

(3) 包装材料

保存箱は埃、煤塵等の汚染物質や、種々の有害ガスから資料を護り劣化を緩和してくれる。また保存容器の利用は物理的な損傷を避けることにも有効である。

紙の変色反応は乾燥した条件下ではほとんど起きないこともわかっている。

健全な資料は密封のメリットが大きく、傷んでいる資料は開放形でその分解生成物を外に逃がすメリットが大きい。

アーカイブズの調査や保存環境の整備といった作業を行う際のよりどころとなる、科学的な理念と方法論が蓄積されつつあることがわかる。こういった知見は本来、人物研究、歴史研究にたずさわる人々と機関にとって、欠くことのできない共通基盤といえるであろう。創作者研究、創価大学史研究を実証的に進めようとしている創価教育研究センターにとっても、それは同様である。

『アーカイブズの科学』と創価大学

創価教育研究センターは、牧口常三郎先生、戸田城聖先生、創立者池田大作先生に関する研究機関であると同時に、創価大学の歴史に関する資料を収集し、それに基づいた創価大学史の研究を推進する機関でもある。当センターが収集する資料には、図書、雑誌、視聴覚資料、電子資料などとともに、創価大学等がこれまで生み出してきた文書・記録も含まれる。すなわち、当センターは研究機関、専門図書館としての機能を有しているとともに、創価大学の文書館としての役割を果たすべきことは明白である。

『アーカイブズの科学』下巻の140ページには、「創価大学創価教育研究センターが大学アーカイブズ機能を強めている」との記述がある。当センターが対外的には大学文書館の一つとして認識されていることの表れであろう。

創価大学におけるアーカイブズの具体例としては、以下のようなものが考えられる。

(1) 行事に関するもの

創大祭、滝山祭、入学式、卒業式などの各種行事の運営計画書、進行表、登壇者の原稿、ビデオテープ、写真

(2) 教授会に関するもの

教授会の議事録、各教授の研究ノート、原稿

(3) 事務局に関するもの

各種会議の議事録、各部署の起案・決裁文書

(4) 学生に関するもの

学生自治会、学友会・クラブ、寮・下宿、ゼミ、各学生などが生み出したもの

(5) その他

理事会、創友会・会友会、通信教育部、支援者の方々などに関するもの

創価大学を愛する人々は数多い。クラブや自治会、寮での活動、創大祭などの行事において、多くの学生が「大学建設」をこれほど真剣に考え、その責任を担おうとしている大学は、他にほとんど存在しないであろう。創立者の提唱された「学生参加の原則」が、創大独自の文化として定着している証左であり、この学風は創大にとってかけがえのない財産である。このような代々の学生たちをはじめ、創大を愛し、大学建設に身を挺してきた数多くの人々の存在を、時の流れに埋もれさせることなく後代の創大のために記録し伝えることは、「一世代」を意味する30年を経た現在の創大にとって重要な事業である。

また、2003年、2004年には創立者の小説「新・人間革命」において「創価大学」の章が発表された。計103回にわたる新聞連載では、創大の設立以前からの草創の数年間がいきいきと描写され、大学建設に当時たずさわった関係者のみならず、その歴史を初めて知ることとなった現役学生にも感銘を与えた。これを契機として、創価大学史に対する関心は高まっている。

現今の大学をめぐる環境下にあつて、大学が建学の精神を未来にわたって継承し、その個性を最大限に発揮した大学運営を進めていくには、その中核拠点として大学アーカイブズを設置し、大学に関する情報・資料の積極的な収集およびサービス提供を行う機関として位置づけることが今後必須の要件となってくるであろう。創価教育研究センターが大学アーカイブズとしての機能を充実させていくことは、その趨勢を先取りした動きであると同時に、創価大学がその特色に立脚した一流の教育・研究を推進していくための基幹事業であるといえる。『アーカイブズの科学』は、創立者および創価大学の歴史を一步深く学びたいという熱意を共有する方々にこそ、一読をおすすめしたい好著である。